

竹内淳一・武田保幸

### 目 的

本調査の目的は、我が国周辺に分布回遊するイルカ類資源とその利用の実態を把握し、その資源の合理的利用と保存を図るために必要な科学的知見を収集・整備することである。

和歌山県では小型鯨類を漁獲対象とする漁業として、小型捕鯨、追い込み漁業そしてイルカ突棒漁業の三つがある。このうち、水産庁からとくに調査が求められているのは、「イルカ突棒漁業」の漁業実態についてである。この調査によって、イルカ突棒漁業による漁獲選択性と操業実態などの状況を把握し、当該漁業の資源管理に関する情報の充実をはかる。

本調査は水産庁の委託を受けて実施するもので、平成10～14年度の5カ年計画である。調査結果は「平成12年度いるか資源管理調査委託事業報告書」として報告した。ここでは、その概要について報告する。

### 方 法

調査は平成12年度いるか資源管理調査委託事業実施計画書に基づいて行った。

調査項目などは次のとおりである。

#### 1 勝浦市場調査

イルカ突棒漁業によって漁獲され、勝浦市場に水揚げされるイルカ類について各個体ごとの種類、性別、体長、漁獲位置などの生物調査を行った。

調査は、熊野灘イルカ突棒組合の漁業者および勝浦漁業協同組合の速水勝浩氏の協力を得て行った。

##### 1) イルカ類の種類と漁況などの聴取

勝浦市場に水揚げされたイルカ類の捕獲日、種類、性別、体長、水温、船名、発見日時、発見位置などについて漁業者のメモあるいは記憶を基にした聞き取り調査を実施した。

勝浦市場に水揚げされるイルカは、そのすべてが洋上解体されたものである。水揚げ入札時に、調査員が漁獲

物の製品とその重量などからイルカの種類と頭数の確認を行う。体長の測定は、漁業者が原則として巻尺を使い直接測定した。

##### 2) イルカ類の水揚重量調査

水揚船別にイルカの種類とその製品重量を勝浦漁協の浜帳から調査した。

### 2 和歌山県全数調査

和歌山県では、指定されたイルカ類の陸揚地（田辺、太地、勝浦、三輪崎）から、毎日、和歌山海区漁業調整委員会事務局あてに、日別・種類別の捕獲頭数を報告するシステムが確立されている。これによって、種類毎に許可捕獲枠を越えることがないように捕獲頭数の残りを即日を知ることができ、捕獲頭数の漁獲管理が行われている。

この資料を利用して、2000年5月～8月（2000年夏季）と2000年12月～2001年3月（2000年冬季）の期間について、日別・種類別の全捕獲頭数を整理した。

### 3 実施期間

2000年5月8日～2001年3月23日

### 結 果

調査結果の詳細は「平成12年度いるか資源管理調査委託事業報告書」として報告しているため、次に示す項目ごとに主な調査結果を示す。

#### 1 勝浦市場調査

##### 1) イルカ類の種類と漁況などの聴取

勝浦市場における漁獲物の種類、性別、体長、漁獲位置などの聴取した結果の詳細は、個体識別して表にとりまとめ遠洋水産研究所に報告した。ここでは月別あるいは季節別に集計した結果の概要を記載する。

##### (1) 勝浦市場における捕獲状況

勝浦市場に水揚げされた1999、2000年の種類別・月

\*いるか資源管理調査委託事業費による。

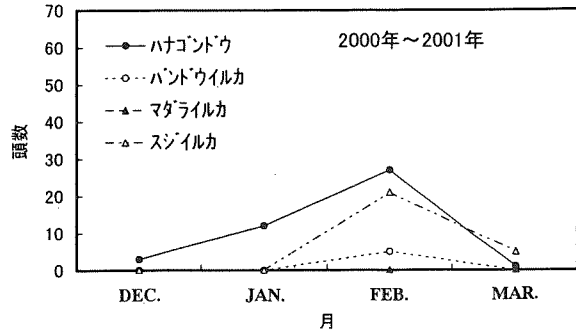
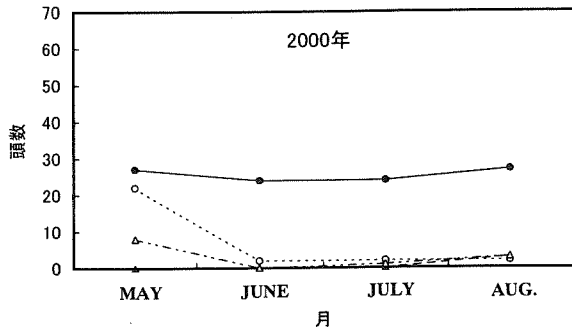
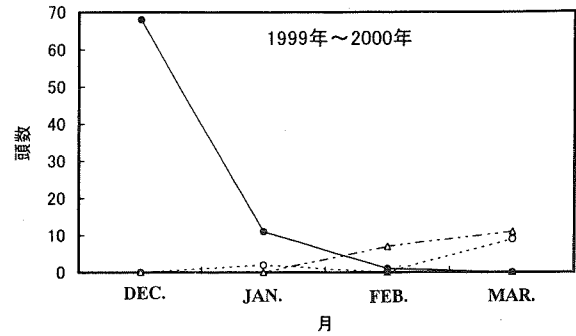
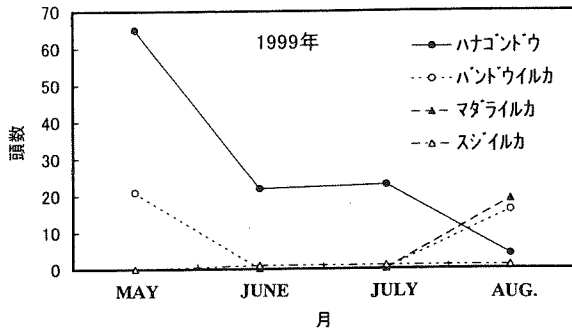


図1 イルカ突棒漁業による捕獲頭数の月別変化 (夏季、勝浦市場水揚分)

図2 イルカ突棒漁業による捕獲頭数の月別変化 (冬季、勝浦市場水揚分)

別の捕獲頭数を夏季と冬季にわけて図1と図2に示す。

2000年夏季の捕獲頭数は、5月にハナゴンドウが27頭と前年を大きく下回った。8月にはバンドウイルカ、マダライカ、スジイルカでも前年を下回った。

2000-2001年冬季は、漁のはじまりがかなり遅れ、ハナゴンドウの捕獲頭数は前年を大きく下回った。バン

ドウイルカ、スジイルカは2月を中心に前年を上回った。

(2) 体長組成

捕獲直後に船上で体長測定と写真撮影を行ったハナゴンドウとバンドウイルカの体長組成を、それぞれ図3

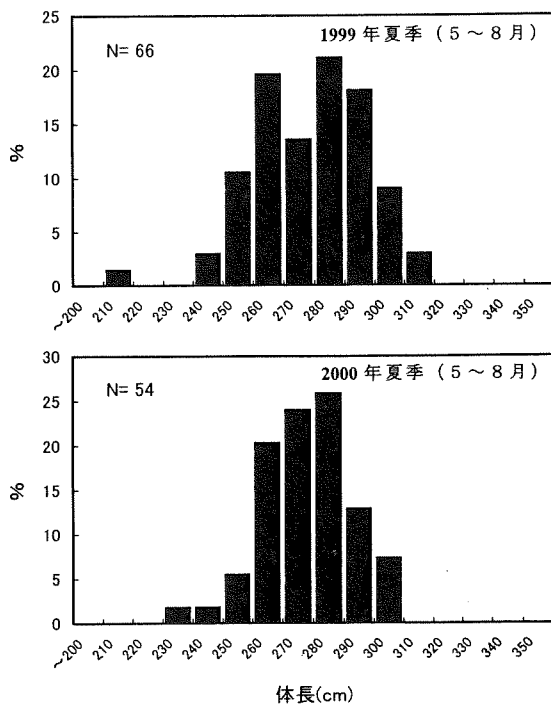


図3 ハナゴンドウの体長組成、2000年5~8月 (夏季)

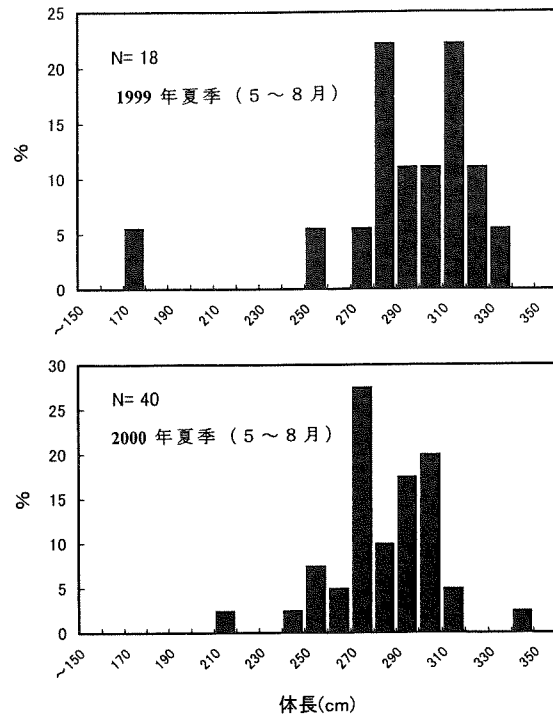


図4 バンドウイルカの体長組成、2000年5~8月 (夏季)

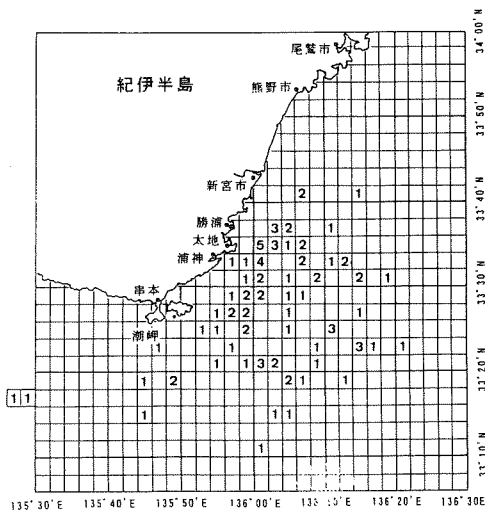


図5 ハナゴンドウの捕獲位置、2000年5～8月(夏季)

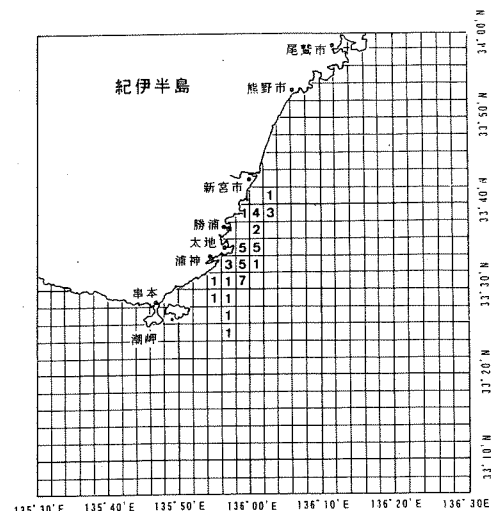


図6 ハナゴンドウの捕獲位置、2000年12月～2001年3月(冬季)

と図4に示す。夏季のハナゴンドウとバンドウイルカでは、いずれも前年より大型個体が少ない傾向がみられた。

(3) 漁場周辺の海況

2000年漁期中、潮岬沖の黒潮は30マイル以上の離岸傾向がつづき、黒潮北縁部はやや離岸した状態となった。熊野灘南部では2000年1～3月と2000年11月～2001年1月に顕著な黒潮内側反流が発達し、熊野灘沿岸の表面水温は高めに経過した。

(4) イルカ種類別の捕獲位置

イルカ種類別の捕獲位置を夏季(2000年5～8月)と冬季(2000年12月～2001年2月)としてとりまとめた。  
 ハナゴンドウ：2000年夏季の捕獲位置は、熊野灘南部のやや沖合側の広範囲(33° 18'～38'N, 135° 56'～136° 20'E)に分布していた(図5)。その位置は、黒潮が潮岬に接近して流れる時に熊野灘南部に形成される地形性渦流域(流れの陰領域で冷水部)にあたる。その分布は、前年に比べ南へ拡大していた。これは、小冷水渦の通過に伴って黒潮がやや離岸(5-35マイル)して流れる傾向にあったためとみられる。

2000-2001年冬季は、前年と同様に梶取崎～駒崎の5マイル以内のごく沿岸部(33° 32'～40'N, 135° 58'～136° 04'E)に分布の中心がみられた(図6)。ハナゴンドウは2000-2001年冬季は熊野灘への来遊が遅れた。これは、前述の黒潮内側反流の発達に伴う高水温のため

餌となるスルメイカの来遊が遅れたことに関連しているとみられる。冬季の分布は、夏季に比べるとごく沿岸域に集中していることが特徴である。

このような夏季および冬季の特徴的な分布パターンは、1998～1999年の調査でもほぼ同様のことが示されている。

バンドウイルカ：2000年夏季の捕獲位置は、昨年同様に熊野灘のやや沖合側(33° 18'～28'N, 136° 00'～136° 14'E)に中心があった。

スジイルカ：2000年夏季の捕獲位置は、潮岬南東沖の広い範囲(32° 18'～30'N, 135° 52'～136° 12'E)にあり、黒潮流域から黒潮北縁位置を中心に分布がみられた。2000-2001年冬季は、熊野灘南部沿岸から潮岬南にかけての海域、2頭は紀伊水道側の江須崎沖でも捕獲された。

マダライルカ：捕獲が少ないので、はっきりしたことはわからないが、2000年夏季の捕獲位置は、新宮市沖と梶取崎南東沖であった。

3) イルカ類の水揚重量調査

水揚船別にイルカの種類とその製品重量を勝浦漁協の浜帳から調査した。

勝浦漁協の入札水揚伝票から個体別に製品重量(肉・皮・頭皮・オバキ・ハラミ・バラミ：これらの合計したものを製品重量合計とする)を調べた。ハナゴンドウとバンドウイルカ、スジイルカともに、肉数量と製品重量

合計には、正の相関関係が認められた。

## 2 和歌山県全数調査

和歌山県で水揚げされたイルカ類の種類別、日別の全数調査結果は、表にとりまとめて遠洋水産研究所に報告

した。これを月別に集計し表1に示す。種類ごとの捕獲状況は、前項で示した勝浦市場の結果とほぼ同じである。前年と比較すると、本年の特徴は、夏季に全種類で捕獲頭数が減少したこと、ハナゴンドウで2001年2月に多く、バンドウイルカは2000年7月にきわめて少なかったことである。

表1 イルカ種類別の月別頭数集計(イルカ突棒漁業、和歌山県捕獲全数)

月/種類	ハナゴンドウ			バンドウイルカ			スジイルカ			マダライルカ		
	1998年	1999年	2000年	1998年	1999年	2000年	1998年	1999年	2000年	1998年	1999年	2000年
5月	38	70	28	39	35	48	0	0	18	14	7	4
6月	19	23	25	8	8	3	0	1	1	6	4	2
7月	32	23	24	24	1	2	6	1	1	34	4	0
8月	56	4	27	10	16	3	7	4	5	9	21	6
夏季計	145	120	104	81	60	56	0	13	6	25	63	12
12月	30	77	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1月	18	11	12	1	2	0	4	0	0	0	0	0
2月	12	1	27	7	12	7	68	25	54	2	0	0
3月	-	0	1	-	9	1	-	15	5	-	0	0
冬季計	60	89	43	8	23	8	0	72	40	59	2	0

注: 1, 2月の年号は表頭の翌年である。